みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

マヤ文字解読の現在 (特集・失われたことばの発掘)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八杉, 佳穂 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5664

マヤ文字解読の現在

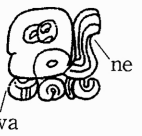
八杉佳穂

言語学を初め考古学・図像学などによる学際的な研究から、マヤ文字の解読はいま飛躍的に進んでいる。様々な解読例の実際と、そこから読み取れるマヤ社会の実像を紹介する。

一　マヤ人は言語学者

ここ二〇年あまりのマヤ文字解読には目を見張るものがある。この二〇年の成果を一言で言うなら、解読方法がより言語学的になったということができよう。文字の構成を分析して取り出した個々の文字素を、マヤ諸語の語や文法接辞と比較して、適当と思われる音を当てはめていっているからである。もしこの言語学的ともいえる解読法が正しいのなら、古代マヤ人は偉大なる言語学者であったといわねばなるまい。

たとえば図1を見てみよう。これは即位の文字である。三つの文字素からできている。これを chum-wa-ne＞chum-wan と読んでいる。いちばん大きな要素が、chum「座る、即位する」という語根である。これに wan という接尾辞がつく言語にチョンタル語などがあるが、文字では、それを wa-ne＞wan と、いわば英語を仮名で記すような書き方で書かれているとみるのである。文法接辞を分析するとともに、それを音節文字で書き表わしているのであるから、古代マヤ人はそうとう言語学の素養が



即位の文字
図1

あったとみなくてはなるまい。

一つひとつの文字素に言語の形態素を当てはめていく読み方により、解読は著しく進展しているのであるが、最近の文字研究には、もう一つ大きな成果がある。解読作業は、言語学ばかりでなく、考古学や図像学、エスノヒストリーなどを合わせた学際的な研究により進められてきた。文字の解読に考古学や図像学などの成果を合わせて、よりダイナミックに、古代マヤ社会が描かれるようになってきているのである。たとえば、それぞれの都市と密接に関係する紋章文字の分布と都市の規模を考え合わせ、都市の勢力図を策定したり、戦いや結婚を表わす文字から、都市間の戦争や同盟、降嫁などが推定されている。本稿ではこの二つのうち、最初の方に重点をおいて、マヤ文字解読の現状を述べてみよう。

二　マヤ文化の資料とその年代

その前にまず、マヤ文字の年代と資料について触れておこう。マヤ文字の資料は、二九二年から九〇九年までの文字が主である。もちろんそれ以前の文字も見つかってきているし、それ以後の文字も、絵文書や一六世紀に残されたランダの文字などがある。それらもマヤ文字の研究には欠かすことができない資料であるが、二九二年から九〇九年までのマヤ文明がいちばん栄えた古典期という時代の資料が解読の主対象となる。

資料のほとんどは、石碑やリンテル（まぐさ）、石板、骨などに「彫られた」文字であるが、そのほか、壁画や土器に「描かれた」文字もある。四つ残されている絵文書は後古典期の作といわれるが、内容は古典期のもので、描かれた文字の範疇に入れることができる。

六〇〇年あまり続いた古典期は、通常前期と後期に分けられるが、六〇〇年以降の後期の文字は、明らかに前期の文字と異なる。一言でいえば、後期はより分析的な文字に発展している。言い換えれば、音節文字がより多く用いられてくる。

全体の量は、残念ながら、まだ誰も正確にいうことができない。一九六二年に出版され、いまだに利用されているトンプソンのカタログによると、主字は一二、四二五と数えられている。これには、神や人間の横顔を描いた頭字などが省かれているし、当然のことながら、このカタログが出版されて以後、大量に見つかっている新しい資料も含まれていない。それらを全部含めると、マヤ文字の全量は、おおよそ三万字

ぐらいになるのではなかろうか。三万という数は、トンプソンのカタログの数字に比べると多いかもしれないが、見方を変えると、八〇〇くらいの文字素の組み合わせの総量がこれくらいしかない文字を解読の対象にしているわけである。

三　解説の実際

マヤ文字は現在どんどん読まれている。それを形容するなら、ともかくなんでもいい、当てはめた読みで少しでも意味が取れれば解読できたことにしよう、という感じである。読めたという文字でも、それが単独例から得られたのであれば証明されたことにはならない。その他の文字素と組み合わさった場合やその他の文脈での使われ方などが検討されなければならない。そうして問題ないとみなされた読みはまだまだ少ない状態である。

マヤ文字を読もうとする試みは前世紀末から始まっている。そして一九三〇年代には、サピア=ウォーフの仮説で有名なウォーフが試みているし、一九五〇年代には旧ソ連のクノロゾフが音節的な読み方を提唱している。しかしいずれもまともに取りあげられることはなかった。

マヤ文字が読めるという確証が得られたのは、パレンケ遺跡の大王の名パカルの文字が解読されてからといってよい。ラウンズベリーによるその解読は、一九七四年に出版されたが、楯を表わす表意文字に振り仮名がついているような構成になっており、見事な解読といえる。しかしその解読は、なかなか認められることのなかったクノロゾフの原則に基づいたものである。

〈東〉　ランダのアルファベットのca　ランダのパシュ月の文字　パカル王の文字

図2

クノロゾフは、子音―母音―子音というマヤ語の音節主型は、子音―母音という音節文字によって書かれると提唱した。すなわち、CVC（子音―母音―子音）は、CV＋CV（子音―母音＋子音―母音）と書かれ、最後の母音は読まれないという説である。クノロゾフの解読には間違いが多いが、この説が正しいことはその後の解読で充分裏付けられている。これは言うなれば、仮名で英語の単語などを表わす書き方と同じである。

こうした解読のもとは、実は一六世紀の中頃に書かれた『ユカタン事物記』にあった。その中で著者ランダ神父は、後にランダのアルファベットといわれる文字や暦の文字を残して

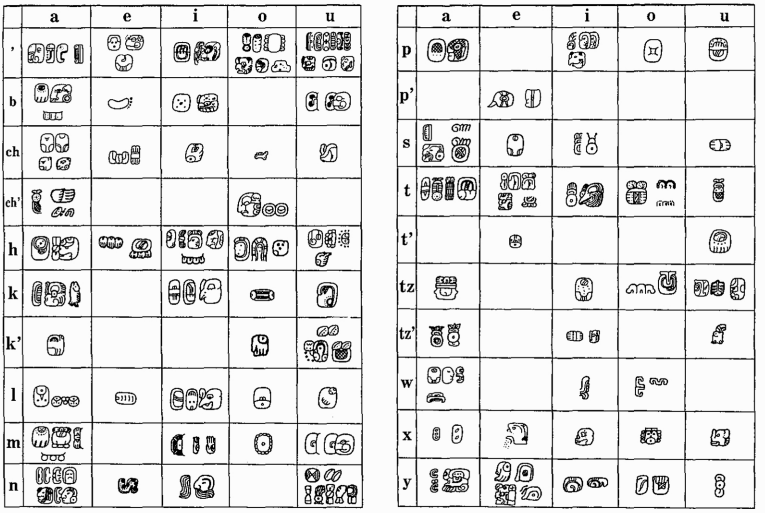


表1（Tom & Carolyn Jones, *Maya Hieroglyphic Workshops,* 1994より）

いた。それらを手がかりに、文字自体が表わしているものやマヤの言葉を考え合わせて、解読が進んできたといってよい。

パカルを表わす三つの文字素のうち、パは暦のパシュ月の文字の一部に記された文字であり、カはランダのアルファベットにあった文字であり、ランダのアルファベットを軸に、音節文字が少しずつ同定されてきた。ラは東（ラキン）を表わす文字のラを表わす文字素として使われている。こういう違う文字に使われている例が見つかれば、読みは証明できたことになる。

現在のところ、やみくもに音を文字に当てはめている感じがしないでもないが、ともかくもこれまで得られた音節文字を集めると、表1のようになる。これはちょうど五十音図のようなものである。この中には、いろいろ異なる場面に現われる場合からして確かに解読されたといえる音節文字のほかに、まだまだそうした支えのない危険な読みが混じっている。しかしこれを利用して、いろいろ異なる場面に生起する音節文字に、この音節図の音を当てはめて、納得いく意味が得られれば、解読ができたことになる。

少しずつ取り出されてきた音節文字から、パカルの文字は読まれたのであるが、音節文字のテキストへの適用から、テ

アルトゥン・ハの耳飾りの文字

図3

キストの内容に関して、さらに新しい世界が開けてきた。それは、音節文字の読みをアルトゥン・ハから出土した耳飾りに刻まれている文字に適用したときにおこった。アルトゥン・ハの耳飾りの文字の一つに、それまで知られていたトゥとパという音節文字で書かれているものが見つかった。トゥとパをクノロゾフの原則に従って読むと、トゥプという語が得られる。今度はマヤの辞書を調べる番である。辞書にはトゥプは耳飾りという意味が書いてあった。さらにこの文字には三人称の所有接辞を表わす接字がついている。すると、そのあとにくる文字は、この耳飾りの所有者と推測できる。

耳飾りが文字として記されているのなら、皿や壺だって、そのものの名前を記した文字があるに違いない。思いもかけない方向に解読は進展していった。実は皿や壺には、埋葬儀式歌の類が書かれていると思われていたのである。ところが、皿に現われる文字のなかに、皿を表わすラックというマヤの言葉が、よく知られているラとカという音節文字で書かれていた。マヤ人はものの名前を表わす文字を記していたことになる。

ラック
皿の文字

ウチァブ
壺の文字

図4

そうすると壺だって、文字で表わされているに違いないと思うのは当然である。現在、壺に描かれている文字のなかで、壺を表わすと思われる文字は、ウチァブ uch'ab' と読まれている。ところがこの語は、もともとウク uk'（飲む）という語に道具などを表わす接尾辞 -ab' がついてできたものである。この解読のもとになったのはチョル語である。チョル語は *k' の音が口蓋化してチ ch' に変わった言語である。しかしマヤ文字が使われていた時代には口蓋化はおこっていないことが証明できる。そうするとこの解読はおかしいということになる。さらに、この文字のあとには、カカオと読まれている文字が生起することがあり、カカオが入っている壺という文字列とみられてきたが、その文字列は、なんと壺ばかりでなく、皿にも出てくる。いかに想像力豊かな解読が行われているかの例として挙げておきたい。

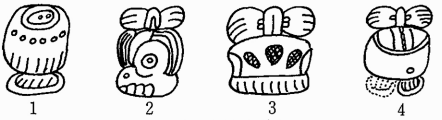
口蓋化に関して、最初の文字に戻って、一言つけ加えておきたい。即位はいろいろな文字で表現されているが、図5は、kum-la-ha＞kum-lah と読まれている。ラは先ほどのパカル

の文字や皿を表わす文字にあったラである。それがハというランダが挙げた文字の中に取り込まれている。だからラフと読めるというのである。kum-lah は「座った」という意味のユカテク語で、確かに即位にふさわしい読みである。この文字まで、チョル語読みで、chum-lah と読む人がいるが、それらは、*k がどのように変化したかという言語学的な知識のない人々である。先の chum-wan はチョル語で、kum-lah の方はユカテク語を表わしているとする意見は、少しは言語学がわかっている人である。これだと、マヤ文字時代にチョル系とユカテク系の二つの方言に分かれていたという意見となる。マヤ文字が用いられた地域は広く、南の現在チョル語やチョルティ語が話されている地域には、その場所にしかない文字がいくつかあり、方言差があったとみてもおかしくない場合があるが、この場合はおかしい。というのは、図1の例も図5の例も、現在チョル語が話されている地域にあるパレンケにみられる文字である。方言が違うのなら、同じ遺跡に出るのはおかしいはずである。言語学の知識を少し応用すれば、おかしいとわかる解読例がたくさんあるが、これはその一例である。

即位の文字
図5

少し横道にそれたが、もう一つ解読法の強力な武器になっているものに、音声補助符という考えがある。たとえば、マックという暦の月がある。文字では、図6のように、いくつかの書き方がされる。最初の二つは音節的にマとカと書かれている。三つめは、マ＋マックと書かれているとみてよいかもしれない。亀の文字はアックという亀ではなく、マックという亀であることを示すために、ランダのアルファベッドのマが添えられた。マが音声補助符の役目を果たしているわけである。しかしマの下の文字素は、蛇カンである可能性のほうが高い。そうすると、カンの頭字のカを使ったとみたほうがよいかもしれない。四つめは、上からマ、マック、カと書かれているとみたい。主字がマックと読まれることを上下の文字が示している。これも音声補助符であるが、振り仮名ともいえる。

ところがである。日を表わす文字は、マヤ文字資料の最初から出現する文字である。この文字には、図1にみられたニ(ni)の文字素がつく場合がある。k'in-ni であり、この文字がキンと読めるようにつけたと解釈すること



1　2　3　4

マック月の文字
図6

になる。こんな誰もが知っている文字にまで、音声補助符をつけるであろうか。大変疑わしい(日はもともとクィフ *q'ix であり、それが k'in になったため音声補助符が必要になったと解釈できるかもしれないが、マヤ文字時代にはすでに *q は k にかわっていたとみられる)。ところが、これを音節表記の萌芽とみると、事態は俄然おもしろくなる。k'i-ni∨k'in とみるのである。音声補助符という考えと、音節表記の萌芽とみる考えは、よく似ているようで、まったく異なる。

四　読みとれたマヤ社会の姿

解読が進んできたことでわかってきた、マヤ社会の歴史や都市間の交流、敵対関係などにも、少し触れておきたい。

一九五〇年代まで、マヤ人は時の計算に没頭していた平和な人々だと信じられていたが、一九五八年にハインリッヒ・ベルリンによって紋章文字が発見され、一九六〇年にはタティアナ・プロスクリアコフによって、ピエドラス・ネグラスの王の名前や誕生や即位の文字などが同定され、碑文には歴史が書かれていることがわかったのである。さらにプロスクリアコフによって一九六三〜六四年に発表されたヤシュチランの碑文の分析からは、その王朝史ばかりでなく、碑文の特徴も明らかになった。最初に日付があり、次に動詞があり、目的語があって、主語がくる。これは三〇あまりあるマヤ諸語のうち、碑文が書かれた言語の直接の子孫と推測されるユカテク語などの低地諸語の構造と同じである。

ベルリンによって発見された紋章文字は、ある都市に特有の文字であり、都市の名前または支配者の家系などを表わすものと思われるが、最初は八つ見つけられただけであった。しかしその後紋章文字を持っている都市は、碑文を持つ二〇〇あまりの都市のうちの約二割ほどになった。これをたよりに、遺跡間の関係や、大きな遺跡とそのまわりにある小さな遺跡との関係などが明らかになってきている。

古典期を前期と後期に分けて、最近の成果を少し紹介しておこう。

前期ではたとえば、グアテマラの低地ペテン地方の北部のティカルは、北のライバルであるワシャクトゥンを三七八年に征服した。ティカルの紋章は、最近精力的に発掘が行われてきたベリーズのカラコルにも出現する。どうやらティカルと戦争を行い、カラコルはティカルに勝ったようである。ティカルが六世紀から七世紀にかけて一時衰退したのはそのためかもしれない。一方ヤシュチランでは、エル・ペルーやティ

カルから王家の人の来訪が記録されている。しかしながら、そうした記録は、古典期後期に比べると、圧倒的に少ない。

古典期後期になると、マヤ文明は絶頂を迎える。それとともに、文字も洗練されてくる。世俗的なことばかりでなく、儀式に関することなど、様々なことを文字で記すようになる。たとえば、西のパシオン川流域のドス・ピラスやアグアテカなどでは、ティカルの紋章とほとんど区別できない紋章文字を持っている。おそらく前期末にティカルから逃れた人々がそこにすみかを定めたのであろう。ナランホの古典期後期の王家は、解読初期はティカルから来た女性により始まったとされていたが、ドス・ピラスの解読が進んだ結果、ドス・ピラスの紋章であることがわかった。父親はドス・ピラスの初代の王であった。

戦争はいたるところであったようである。戦いのなかでもっとも有名なのは、ボナンパックの壁画である。そこでは戦いの準備からすさまじい戦いや、戦いの終了後の儀式などが描かれている。ボナンパックがあるウスマシンタ流域では、戦いのテーマが石碑やリンテルに描かれている。ヤシュチランの楯ジャガー王はボナンパックの王を捕らえているし、トニナの王はパレンケのカンシュル王を捕らえている。

南東地域のコパンとキリグアの関係は、文字の解読からもっとも有名なものとなっている。コパンを隆盛に導いた「一八の兎」王は、キリグアの「二足の空」または「カワック空」とあだ名される王に捕らえられ、首を切られて殺されたというのである。斧の文字が接字としてついた文字をもとにそう解釈されているが、もちろん首を切って殺すという文字であることはまだ証明できていない。

マヤ文字の解読は、このところアメリカを中心にたくさんの人が参加して、非常に進んでおり、上で見てきたように、大筋はすでにわかってしまった。解読のお陰で、発掘の予想が立ち、発掘の結果が解読を裏付けた例もある。しかし、問題点をいくつか挙げたことからわかるように、確かな基盤にのって解読された文字は意外に少ない。カタログは一九六二年に出されて以来出版されていない。それ以後たくさんの資料が発見されて、整備されてきたのにかかわらず、ないのである。時代別の文字などのカタログもほしい。そうした基礎作業がさらに新しい世界に案内してくれるのではなかろうか。

（やすぎよしほ／中米言語学）